

村上春樹『スパゲティーの年に』

レポート集

- 2022年11月19日（土）13：45～（第17回）「スパゲティーの年に」第1回討論
2022年12月17日（土）13：45～（第18回）「スパゲティーの年に」第2回討論
2023年1月14日（土）「スパゲティーの年に」レポート締切。
2023年1月21日（土）13：45～（第19回）「スパゲティーの年に」第3回討論

目 次

- 1971年とスパゲティーと孤独の関係 ……………T.T. (2)
- 時間とは何か？ シンボルとメタファー ……………佐野 之人(7)
- 村上春樹 スパゲティーの年に ……………田中 克典(14)
- スパゲティーの年越し ……………大藤 渉 (17)
- 村上春樹「スパゲティーの年に」読書感想文……………岡部 昌平(21)
- 『デュラム・セモリナの願い』 ……………奈原 伸雄(23)
- トラウマからの解放 ……………村上 林造(26)

1971年とスパゲティーと孤独の関係

「スパゲティーの年に」レポート

T.T.

村上春樹作品は大体いつでも、第一印象は「？」なのですが、今回の「スパゲティーの年に」を初めて読んだ時にはとりわけ？が多くて途方に暮れました。

当初思いついた疑問は、概ね次のようなものです。

- ①1971年という時代の意味は何なのか。
- ②雨の午後に、「僕」の部屋を訪れようとする人々は何か。何故、結局ノックをせずにごくここに立ち去っていくのか。
- ③何故スパゲティーを茹でることは「何かへの復讐のよう」で「裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる」ようなのか。
- ④「僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み・・・チーンという悲痛な音を立てるまで一歩もそばを離れなかった」何故シェパードの形なのか、何故悲痛な音なのか。
- ⑤「スパゲティーたちはおそろしく狡猾だったから・・・今にも鍋の縁をすりと超えて夜の闇の中に紛れ込んでしまいそうだった。」とはどういう意味か。
- ⑥「僕」がスパゲティーを悼むのはなぜか。
- ⑦電話が鳴った時、何故「僕」は「死んだ蠅のよう」だったのか。
- ⑧電話をかけてきた「彼女」とその元彼は、「僕」とどういう関係だったのか。「彼女」のことをなぜ「僕」は「とても印象が薄くて、午後4時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子」と思ったのか。何故電話の受話器は氷のように冷たくなるのか。
- ⑨電話のシーンにはどういう意味があるのか。
- ⑩「永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティー」とは何か。何故それについて考えることは悲しいのか。
- ⑪何故うどんでもラーメンでもなくスパゲティーなのか。なぜイタリアの小麦が「孤独」なのか。

しかし、これもいつも思うことですが、読書会で皆様のご意見を伺っているうちに何となくわかったような気がしてくるから不思議です。

「読書会マジック」(?!)と心の中で呼んでおります。

①1971年の意味は何なのか

この作品の時代性については、主に村上先生と岡部さんがおっしゃったことをヒントに考えました。

1971年より少し前というとはやはり、何らかの形で「僕」は学生運動か、それに近いような何か反体制的運動にコミットメントしたのではないかと思います。そこで「僕」は、具体的には何もわからないものの、すっかり疲弊したのではないかと思います。そして「僕」は心を閉ざし、あらゆるつながりを断って引きこもり、ただスパゲティー作りに没頭するようになった、という物語である気がしてきました。

②雨の午後に、「僕」の部屋を訪れようとする人々は何か。何故、結局ノックをせずにごくここに立ち去っていくのか。

このシーンは、「僕」の心象風景をあらわしていると思います。反体制的活動（のようなもの？）にコミットする前、つまりおそらくは大学入学前ごろの精神状態に退行してしまっていることを示しているのではないのでしょうか。

しかし「僕」はスパゲティーを茹でることによって心の問題を曲がりなりにも自発的に処理しようとしているのであって、そのような心の問題が生じる前の要素（＝雨の午後に訪れようとする人々に象徴されている）を必要としているわけではないので、「結局ノックをせずにごくここに立ち去っていく」ことになったのだらうと思います。

③何故スパゲティーを茹でることは「何かへの復讐のよう」で「裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる」ようなのか。

この部分は大きなヒントである気がします。「裏切った恋人から送られた古い恋文」＝スパゲティー、そして、「暖炉の火の中に滑り込ませる」＝茹でる、という対応が明確だと思います。古い恋文を燃やすのは、アンビバレントな感情を清算するためですから、「僕」がスパゲティーを茹でるのも、かつて自分が参加していた反体制的活動（のようなもの？）に対するアンビバレントな感情を清算するためのはずです。

④「僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した湯の中に放り込み・・・チーンという悲痛な音を立てるまで一歩もそばを離れなかった」何故シェパードの形なのか、何故悲痛な音なのか。

「踏みつけられた時の影」とは、「僕」が踏みつけられた時の、「影」（＝それにまつわるネガティブな一切）と解釈してもいい気がしますし、踏みつけられた「時の影」（＝アンビバレントな感情のうち正の感情の根拠となるような、良かった時代の思い出）と解釈してもいいように思います。いずれにせよ、アンビバレントな感情のうち負の側面が芽生えた時、「僕」は（身体的か精神的かはわからないのですが）実際に踏みつけられたと感じたのではないのでしょうか。シェパードはこの作品の中で3回登場しますが、警察犬として

よく使用される犬種であることから警察の象徴なのかもしれませんし、「僕」が実際に反社会的活動のなかで警察犬にも恨みを持つようになった可能性もあると思います（シェパードに噛みつかれるとか、倒れたところを踏みつけられるとか）。キッチンタイマーの音は、自分の一部であったアンビバレントな感情が釜茹でにされて成仏したことを示すので、悲痛な音、と表現したのではないかと考えました。

⑤「スパゲティーたちはおそろしく狡猾だったから・・・今にも鍋の縁をすりと超えて夜の闇の中に紛れ込んでしまいそうだった。」とはどういう意味か。

スパゲティーを茹でること＝古い恋文を燃やすこと、のたとえを用いると、アンビバレントな感情の処理には細心の注意が必要で、うっかりすると恋人への恋心だけ暴走するとか、逆に恨みだけが暴走するとかしがちである、ということを行っているのではと思います。いずれにしても、成仏させるべきアンビバレントな感情が「僕」の理性のコントロールから逃れることで、「僕」自身がダークサイドに落ちてしまう危険があることを「夜の闇の中に紛れ込んでしまいそうだった」と表現したのではと思います。

⑥「僕」がスパゲティーを悼むのはなぜか。

⑦電話が鳴った時、何故「僕」は「死んだ蠅のよう」だったのか。

引き続き、スパゲティーを茹でること＝古い恋文を燃やすこと、のたとえを用いると、恋人への愛憎のようなアンビバレントな感情は、燃やして成仏させるべきであったとしても、「僕」の心に今もなお深く結びついていてそう簡単には捨てられないはずのものです。佐野先生が、「死んだ蠅のよう」だった「僕」はぎりぎりのところに追い詰められていた、というようなことを仰いました。何故そんなぎりぎりまで追い詰められていたのか、考えてみました。大切な人の死を悼むとき、心のエネルギーは消耗されます。「僕」は多大な心のエネルギーを消費しながら自らのアンビバレントな感情を成仏させている、ということ「スパゲティーを悼む」と表現しているのではないのでしょうか。⑤にも関連しますが、スパゲティーを茹でることは決して簡単ではなく、細心の注意を払って心のエネルギーを消費しつつおこなうことなので、1年近くずっとスパゲティーを茹でていた「僕」はすっかり疲労困憊してしまい、「死んだ蠅のよう」になってしまったのだと思います。

⑧電話をかけてきた「彼女」とその元彼は、「僕」とどういう関係だったのか。「彼女」のことをなぜ「僕」は「とても印象が薄くて、午後4時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子」と思ったのか。

読書会で岡部さんも仰っていましたが、「彼女」とその元彼は、「僕」がかつて所属していた反社会的活動集団のメンバーだったのでしょうか。

「彼女」がどんな人物なのかは、かなり謎でした。「どこかに消えてしまいそう」という言葉から、何やら儂げで弱々しい印象を持ってしまったのですが、「彼女」の発した言葉

や元彼からお金を取り返そうと僅かな伝手を辿る行動からはむしろ遅しさも感じて、かなり違和感がありました。佐野先生が「この人は只者ではない」とおっしゃったのがずっと引っかかっています。

手塚治虫の「ネオ・ファウスト」の中で、グレートヒェンに相当する女の子が学生運動に参加している女子学生で、当時の女子学生は地味な身なりにヘルメットとゲバ棒を持つのが普通、みたいなことが描かれていたのを思い出し（うろ覚えなので細部は違うかもしれませんが）、「午後 4 時半にはどこかに消えてしまいそうな女の子」の意味を誤解していたかもしれない、と思いつきました。ひょっとすると、印象が薄いとは、没个性的で自らの意志がない（＝自らの意志が集団のイデオロギーに同化している）という意味であって、元気がないとか弱々しいとかいう意味ではなく、また、どこかに消えてしまいそうとは、粛々と反社会的活動の任務に赴くとかそのために逮捕されるとかいう意味であって、生気のない儂げな女性という意味ではない、と考えたのですがどうでしょうか。

このように考えると、受話器の冷たさの意味もわかる気がします。「僕」がスパゲティを成仏させるのには火が必要なのですが、受話器は火の対極である氷の世界（＝僕がトラウマを受けた世界）につながっているのです。この冷たさは、「彼女」の属する反社会的活動集団に対して「僕」が抱くアンビバレントな感情のうち、トラウマに由来する憎しみや嫌悪を意味するのではと思います。そして「彼女」も、「僕」の悪感情を知っていたために、その集団の一員である自分も嫌われていると考えて「ねえあなた、私のことが嫌いなんでしょ?」と言ったのでしょう。しかし「僕」は「彼女」をロボットのような没个性的な存在と考えているので、ただ印象がないという感想しか出てこないのだと思います。

⑨電話のシーンにはどういう意味があるのか。

「彼女」からの電話のシーンの意味も、かなり謎だったのですが、本田さんが電話によって「僕」に変化がもたらされたと言われたことが、目から鱗でした。

その本田さんのご発言に便乗して、私は「スパゲティを茹でるという行為が、それを他人に（おそらく初めて）言葉で伝えたことによって、完成したという意義があるのでは」というようなことを読書会で申し上げました。

加えて、電話の最後の方で「彼女」が「力なく笑った」あとで「あなたのスパゲティによろしくね。美味しいといいわね」と言ったのは、皮肉ではなくて、「彼」の「スパゲティを茹でる」行為の受容の言葉ではないかと思えますし、「彼女」の印象も電話の最初の方とは変化してきているように思います。ここには最早、先程の氷のような冷たさはないような気がします。「彼女」がロボットではなく血の通った人間であることが「僕」にとって幾分明らかとなり、それが「僕」を幾分温めたのではないのでしょうか。

⑩「永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティ」とは何か。何故それについて考えることは悲しいのか。

「永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティー」とは、電話のシーンを受けていることを考えると、「僕」が助けなかったために窮地に陥った「彼女」のことだと思います。「彼女」は電話のシーンで「僕」のスパゲティーを茹でる行為を認めたために、「彼女」にまつわる記憶は釜茹での刑を免れたのでしょうか。「彼女」もまた「僕」同様翻弄された哀れな若者の一人に過ぎなかったということに「僕」は気づき、悲しんでいるのではないかと思います。しかし電話がかかってきた時点では、「僕」はトラウマに起因する憎しみや嫌悪に囚われて「彼女」の要求を拒絶することしかできなかったのです。

⑪何故うどんでもラーメンでもなくスパゲティーなのか。なぜイタリアの小麦が「孤独」なのか。

イタリア人が孤独を輸出していた、というのは筋が通っていません。「下らないドタバタはもうごめんだった。僕は裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。」という言葉にも伺えるように、「僕」は主体的に巣ごもり状態に入ったのです。「僕」の孤独は、主体的なものです。確かに「僕」がそのような孤独を選択せざるを得なかったのは、これ以上トラウマを受けないため、そしてトラウマから回復するためだったのでしょうか、トラウマの原因と推察される反社会的活動とデュラム・セモリナの関係は一切示されていませんし、連想としても結びつきそうにないです。ただ、「僕」がスパゲティーに自らのアンビバレントな感情を勝手に絡みつかせて一緒に茹でて成仏させていただきただけで、スパゲティーとその材料である小麦に問題があったわけではありません。イタリア人にとってはいい迷惑な気もします。

スパゲティーについての連想は、奈原さんの「イタリア人＝コミュニケーションの天才」というご指摘が的を射ているように思います。自宅でこねて茹でるのであればうどんがびったりなのですが。単に「僕」の陰鬱な孤独との対比を鮮やかにするための修辞として、スパゲティーやデュラム・セモリナという言葉のもつイメージ（イタリア人＝コミュニケーションの天才、からっと乾燥した地中海の夏など）が必要だったのではないのでしょうか。

こんなふうにレポートを書き終えた瞬間には、謎解きは概ね終わった気ではいるのですが、読書会の皆様のレポートを読む時にはまた、自分の読みは何て浅いんやろうと愕然とすることも予想しています。これもまた「読書会マジック」として、楽しみです。

時間とは何か？ シンボルとメタファー

——村上春樹『スパゲティーの年に』を読む——

佐野 之人

はじめに—シンボルそれともメタファー？—

この小説はアスタリスク（*）によって四つの部分に区切られていて、最初の部分は「スパゲティーの年」の開始について、第二の部分はその様子と経過について、第三の部分はおそらくはその終末のきっかけとなる女の子からの電話について、第四の部分は現在の視点からの当時の感想が述べられている。第一の部分から第三の部分はいずれも、語り手「僕」の回想という形をとっている。

一度読み終えたあとでも、読者の考察はおそらくすべて『スパゲティーの年に』という題に集中するだろう。「スパゲティーの年」とは何であろうか。「に」とはどういう意味であろうか。こうした問いに迫るために読者はその言葉が出てくる語り手の体験に迫ろうとするだろう。そのことは同時に読者自らが、日常的な理解を破って事柄の根本経験に導かれることを意味するだろう。

「スパゲティーの年」については、冒頭に「一九七一年、それはスパゲティーの年であった」とある。読者の中には一九七一年について具体的なイメージを持っている者も、そうでない者もいるに違いない。具体的なイメージを持っている者は、例えば一九七一年は学生運動の年である、というようにその年を象徴する「出来事」を挙げるかもしれない。この場合は一九七一年という年を出来事で象徴したことになる。そういうイメージを特に持たない者も、そうした象徴的な出来事があったことを知ることで、その年を知ることについては満足するに違いない。

同じことは個人史についても言えるだろう。例えば〈一九七一年は大学入学の年であった〉などはそうした例になる。こうした通常の理解に従えば「スパゲティーの年」は語り手「僕」の個人史における象徴的な出来事を言い表したものと考えられるだろう。その場合スパゲティーは「僕」にとって一九七一年の「象徴（シンボル）」なのであり、「スパゲティー」はスパゲティーに関する何らかの出来事の象徴なのである。事実第一の部分の最後には「紀元一九七一年、スパゲティーの年の出来事である」とある。そうだとすれば『スパゲティーの年に』の「に」もその年「に」何らかのスパゲティーに関する何らかの「出来事」があった、そのように理解するはずである。

当初はそうであった。しかし一度読み終えた読者はすでにそうした理解では済まない表現に出会っていることも認めるだろう。例えば「スパゲティーたちはおそろしく狡猾だった」はどうだろう。こうなると「スパゲティー」はシンボルではない、メタファーである。また「僕は彼らを悼む。一九七一年のスパゲティーたち」という表現からすると、『スパ

ゲティーの年に』の「に」も別の意味合いを帯びてくるだろう。この小説全体が「スパゲティーの年」に対する追悼文であり、「に」は献呈の対象を示す「に」ということになる。そうであるとするなら、「スパゲティー」とは何のメタファーなのか。そもそも「スパゲティー」はメタファーなのか、それともシンボルなのか。

読者はこうした問いに答えるべく、「スパゲティーの年に」という言葉の出处である、語り手「僕」の体験に迫っていくことになる。

語り手「僕」の体験(一)一九七一年

「僕」が一九七一年に「スパゲティーの年」を開始したのは、それ以前に「くだらないドタバタに巻き込まれ」たからであり、もう「誰とも関わりあいになりたくなかった」からである。ただしこの「ドタバタ」を「僕」がどのようなものとして受け止めていたかについて詳しいことは分からない。こうして開始された「スパゲティーの年」であるが、「僕は生きるためにスパゲティーを茹でつづけ、スパゲティーを茹でるために生きつづけた」とあるように、スパゲティーを茹でるにしても、ソースを作るにしても徹底したものであった。そうして「アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった」とあるように、スパゲティーを作ることが生きることのすべてであった。

徹底ぶりはスパゲティーを作ることばかりではない。「僕」は徹底してスパゲティーを食べた。紅茶とサラダを作り、「それらをテーブルにきちんと並べ」、そうして「新聞を横目で睨みながらゆっくり時間をかけて僕は一人でスパゲティーを食べた」とある。〈新聞を読みながら〉ではなく「新聞を横目で睨みながら」とあるのは、スパゲティーを食べている最中は新聞を読んではならない、という禁忌を自らに課していたからではなかろうか。要するにスパゲティーを食べる時もきわめて集中していたということであろう。

こうした集中の中で次第に雑念は消えていく。それでも「雨の午後」のような憂鬱な時には雑念が湧いて出てくる。それが「今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入ってくるんじゃないかという気がした」というものである。「僕」の部屋は隅々にいたるまでスパゲティーの匂いがしみついた、いわば結界ともいうべき「スパゲティー」の場である。そこに誰か、すなわち「記憶の切れ端」が雑念として入り込もうとして来るのであるが、「部屋の前をうろうろするだけで、結局はノックをすることもなくそのままどこかに立ち去って行った」というのである。

「僕」はそんな調子で「春、夏、秋、冬」とスパゲティーを茹でつづける。それは「まるで何かへの復讐のようでも」あったという。すなわち「僕」は「踏みつけられた時の影」をこねあげ、「沸騰した湯の中に放り込」んで、「キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一步もそばを離れなかった」のである。何故なら「スパゲティーたちはおそろしく狡猾」なので「目を離すわけにはいかなかった」からだという。すなわち「彼らは今にも鍋の縁をすりと越えて夜の闇に紛れ込んでしまい」、夜の方も「永遠の時の

中に呑み込んでいく」ように、「じっと息をひそめてスパゲティーたちの到来を待ち受けていた」からだというのである。

これは一体どういう光景であろうか。〇〇三昧という言葉がある。「僕」の「スパゲティーの年」も「スパゲティー三昧」と言えば「スパゲティー三昧」だが、スパゲティーが好きで、興味をもって毎日作り、食べ続けた、という通常の意味の「スパゲティー三昧」とは明らかに異なる。それはむしろ主客合一ないし主客未分の精神集中状態としての、言葉の本来の意味における「三昧」に近い。スパゲティーの作り方・食べ方の徹底ぶりもそれ自体すでに修行だし、雑念に対する扱い方（相手にせずほうっておくことで、自然といなくなってしまう）も座禅を思わせる。それは同時に現在（スパゲティー）に集中することで、「踏みつけられた時の影」すなわちぞんざいにあつかわれた時間の影としての過去、「記憶の切れ端」を抹殺する（「悲痛な音を立てる」）ことでもある。もちろんこうした精神集中を持続することは難しい。うっかりするとスパゲティーは意識から逃れていって「永劫の時」「夜の闇」の中へと紛れ込んでしまう。

語り手「僕」の体験(一九七一年以前)

こうした修行の如き「スパゲティーの年」を開始したことから、それ以前の「ドタバタ」を「僕」がどのようなものとして理解していたかが分かるようになる。「僕」が問題にしていたのは時間をどう生きるか、言い換えれば自分の時間を取り戻すことなのだ。時間自体に形はない。我々はこうした時間のうちに何らかの意味を見出し、時間をそうした意味として生きようとする。そうした意味こそが時間だと思い込む。意味を感じれば感じるほど充実した時間を過ごすことになり、そうでなければ無駄な時間を過ごしたと感じる。形のないものに形を与え、それに意味を見出す、これは言葉の機能としてはシンボルである。日の丸が日本のシンボルであり、星条旗が米国のシンボルであるように、食事や睡眠は時間のシンボルである。様々な国旗を見て様々な国をイメージするように、人は様々な事柄のうちに時間をイメージしている。事柄はつねに出来事であり、時間のシンボルである。

しかし我々がこうした事柄に意味を見出せば見出すほど、その事柄に囚われ、振り回されることになる。こうして事柄が時間のシンボルであることが忘却されるのみならず、時間そのものも忘却されて行く。事柄は時間のうちで過去の出来事となるが、これも現在の自分からの意味付けを施されて、それが現在の自分の存在を支えるものであれ、現在の自分の存在を脅かすものとして忌避されるものであれ、過去の時間のシンボルとなる。我々はこうしたシンボルとしての過去の記憶にも囚われ、振り回される。これが我々の日常的な時間経験であり、そのことは「はじめに」で述べたとおり、読者も体験している。我々は過去の時間を出来事としてしか理解し得ないのである。ところが「僕」はこうした時間の過ごし方を「ドタバタ」と呼んで、そうした生き方を「くだらない」と考えたのである。

そうすると自分本来の時間というものが問題になる。そのためには「誰とも関わりあい」ならず、「裏庭に深い穴を掘り」、こうした事柄の「全てをそこに埋めてしまう」だ

けではすまない。そもそも事柄に意味を見出すからそれに振り回されるのである。自分本来の時間を取り戻すためには、そこにまったく意味を見出さないような時間の生き方をしなければならない。それが「僕」にとっては「スパゲティー」だったのではないだろうか。それはもはや「僕」にとってスパゲティーが好物であるとか、興味関心の対象であるとか、そういう「意味」で選ばれたのではない。そうであればたんにスパゲティーに振り回されるだけである。そうではなく、スパゲティーがまったく無意味だから選ばれたのであろう。その場合、時間はシンボルの背後に忘却されることはない。時間とスパゲティーは明確に区別して意識されつつ、「僕」は時間をスパゲティーとして生きることになる。スパゲティーを生きることが時間を生きることになる。これは言葉の機能としてはメタファーである。「僕」は時間をメタファーとして生きることによって自分本来の時間を取り戻そうとしたのである。

語り手「僕」の体験(三)一九七一年十二月

しかしメタファーとしての時間を生きるとは、なお時間そのものを生きることではない。こうした修行のような生活を繰り返し、スパゲティー三昧が真に三昧の境地に近づき、主客の区別も、現実と記憶の区別もあいまいになって来る。「僕はまるで死んだ蠅のように一九七一年の十二月の光の中に何時間もぼんやりと横たわっていた」、とあるように「僕」はギリギリの状態にまで追い込まれていたと思われる。しかしそれでも「僕」が「光の中」にいたことに注意したい。

そこに突如電話がかかってくる。相手はかつての知り合いの恋人である「女の子」だ。ここで「僕」は初めて現実の他者と出会うことになる。もちろんそれまでも「僕」は他者と関わってきた。しかしそれはつねに自分の関心にとっての他者であり、同じ関心から関わりになりたくない他者であったし、「スパゲティーの年」に入ってから、自分一人のスパゲティーの部屋で、他者はいてもいなくてもいい、どちらかと言えばいい方がいいという程度の存在にすぎなかった（「何かの折に誰かと二人で食べることもないではなかったが、でも一人で食べる方がずっと好きだった」）。「スパゲティーの年」の「僕」にとって、本質的に他者は不在である。

電話の中で、もちろん「僕」はこうした現実の「他者」と関わることを拒もうとする。しかし拒めば拒むほどその存在の現実感が増すことになる。現実感はずっと電話の音から始まる。初めは「電話のベルには聞こえなかった」ところから、「見覚えのない記憶の断片」を経て、ようやく「百パーセントの電話のベル」になっている。その後も「僕」は「電話のコード」が「ちゃんと電話機に接続している」かどうかを確認している。現実から逃避したい「僕」の在り方が顕わになる。そうなればいっそう〈電話している〉ということ自体が逃げられない「現実」として「僕」に立ち現れてくる。

「女の子」も最初は「とても印象が薄くて、午後の四時半にはどこかに消えてしまいそんな女の子」だったが、次第に「僕」にとって、現実の「僕」の姿を映し出す現実の「他

者」としての存在を顕わにしていく。「僕」は「トラブルに巻き込まれたいくなかった」が故に、「彼が今何処にいるのか教えてくれない？」という彼女の問いに対して、「知らない」と嘘をつく。嘘であることを強く自覚しているが故に「変な声になってしまう」。すると「彼女は黙りこんだ」。この沈黙が彼女にとってどういうものであったか、それは分からない。たんに〈困った〉と思っただけかもしれない。しかしこの沈黙は嘘で守っている自分の世界を顕わにし、自分が必死になって守ってきた世界が虚無の上に成り立っていることを「僕」に感じさせる。「受話器」が「氷の柱のように冷たくな」り、「僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっ」たのはそのためではないだろうか。

あせった「僕」は言わなくてもいいような嘘を重ねる。しかしそれによって彼女は自分が拒否されていると感じたのであろう。「ねえあなた、私のことが嫌いなんでしょ？」と訊ねる。しかしその問いは「僕」にとっては「突然」のものと聞こえる（「突然彼女は言った」）。「印象のない人間には悪い印象も持てない」などと「僕」は考えているが、他者を避け、他者を嫌っていることに間違いはない。いわば言い当てられた形である。そこで「今スパゲティーを茹でてるところなんだ」と「僕」はまた嘘をつく。「どうしてそんな嘘をついてしまったのか、僕にはよく分からない」と「僕」は言っているが、おそらく彼女に自分の世界の本質を言い当てられ、危険を感じて咄嗟に自分の世界を守ろうとしたのではないか。

こうして「僕」は空想の中でスパゲティーの世界を構想して彼女の脅威に対抗しようとする。しかしすでに現実と空想の区別もできないくらいに自分と一体化したスパゲティーの世界は「僕の心にとってもよく馴染んだ」。そうして「そのときの僕にとっては全然嘘なんかじゃなかった」ということになる。しかしそのことで今や「僕」は彼女の前に自分の世界を丸ごとさらけ出すことになる。彼女は「うん？」「それで？」と言ったのみで、沈黙する。この沈黙の前に今度は「僕」にとって嘘で守られたスパゲティーの世界そのものが立ち現れることになる。「受話器」は、そうしておそらく僕の世界のすべても「再び氷点下の坂道を下り始め」る。

しかしそこで彼女は思いがけない問いを発する。「そのスパゲティーは誰かのために作ってるの、それともあなた一人で食べるの？」これはどういう問いであろうか。少なくとも彼女の電話の要件とは関係はない。「僕」が「一人で食べる」と答えると、今度は「長い間息を殺していた。それからゆっくりと空気を吸い込んだ」とある。そうして「あなたにはきっとわからないと思うんだけど、でも私、本当に困ってるのよ。いまどうしようもないのよ」と電話本来の要件を繰り返す。注目すべきは、スパゲティーを一人で食べるという答えを聞いた後、長い沈黙があり、そのあと「あなたにはきっとわからないと思うんだけど」と切り出したところである。おそらく彼女はこれまでの電話のやり取りを通じて、「僕」の世界の本質が孤独であることを見抜いたのではあるまいか。しかしその時、自分の世界を守ることしか頭にない「僕」はそのことには思い到らない。別れを告げて電話を切る。そうして「光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げ」る。「僕」は「光の中」

にしながら、光の出処を見ずに、相変わらず部屋の天井を見ている。「僕」は一体何を感じ、また何を考えているのだろうか。ここでも「僕」が「光の中」にいることに注意したい。

語り手「僕」の体験(四)現在

一九七一年を過ぎると、おそらく「僕」はスパゲティーを一人で茹で、一人で食べるという修行を止めている。年末の彼女からの電話が一つの転機になったのは間違いないだろう。最後の部分では現在の視点から振り返って当時の感想が述べられている。それは「僕は思うのだけれど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティーについて考えることは悲しい」で始まる。これはおそらくメタファーである。その後すぐに「あの時」と彼女の話に移るから、このメタファーは彼女自身の時間に関することだろう。彼女がお金に困って自分の時間を生きることができなかつたとしたら、つまり「午後四時半の影に呑み込まれて消えてしまった」としたら、「僕にもその責任の一端はあるのだろうか?」、「僕」はそのように感じている。相変わらずスパゲティーを時間のメタファーとして用いているが、「僕」にせよ彼女にせよ、文字通りのスパゲティー三昧を行じているという意味ではありえない。スパゲティーを各自本来の時間に喩えたにすぎない。しかもその時間は独我論的な自分一人の時間ではなく、自分に自分の時間があるのと同様、他者にも他者の時間があること、そうして人と人とが関わりあい、そうした関りの中で責任も負わなければならないことを含むような時間である。「僕」がそうした時間のうちに生きることができるようになったのも、一九七一年の自分の時間が「孤独」であったことに目覚めたからに他ならない。そのことがこの小説の末尾、一行アケた後に述べられている。

「デュラム・セモリナ。イタリアの平野に育った黄金色の麦。一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。」

これもメタファーとして読まなければならない。「イタリアの平野」とは異郷、別世界の喩である。「デュラム・セモリナ」はスパゲティーの原料、すなわち時間そのものである。だとすれば「イタリアの平野」とは時間の源であり、「イタリア人」は全世界の人間に時間を届ける者たちの喩である。「僕」はこうした時間そのものに触れ、そのことによって自らの時間の「孤独」を知ったのである。おそらくこの「黄金色」は十二月の「僕」を包んでいた「光」と通じているに違いない。どんな時にも本来の時間は人間に届いており、人間はそれに包まれているのである。しかしこれは時間の一面にすぎない。

現在の視点からの当時の感想は第二の部分の最後にも紛れ込んでいる。「スパゲティーたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった。僕は彼らを悼む。一九七一年のスパゲティーたち」がそれである。様々な種類のスパゲティーの名を丁寧に挙げ、最後に「名もない気の毒なスパゲティーたち」に思いを馳せた所で、追悼の念を押しえ切れなかつたのであろう。

このスパゲティーは「永遠に茹でられることなく終わった」スパゲティーでも、「鍋の縁をすりと越えて夜の闇の中に紛れ込んでしま」ったスパゲティーでもない。「僕」によって注意深く茹でられ、食べられたスパゲティーである。しかし現在の「僕」の視点から見るならば、一九七一年のスパゲティーも結局は夜の闇へと消えて行ったのである。そもそも一切の意味を持たないということで選出されたスパゲティーすら、「意味を持たない」という点に意味をもっている。我々は意味としての時間を生きることしか、あるいは時間をシンボルとしてしか生きることができない。その意味では時間は絶えず忘却され、夜の闇へと消えていくほかはない。しかも「僕」の「スパゲティーの年」の時間は「孤独」に消えていったのである。「僕は彼らを悼む」とあるように、この小説のタイトル「スパゲティーの年に」はこの小説全体が「スパゲティーの年」への追悼文となっているのである。

おわりに

こうした語り手「僕」の体験を追体験することで読者には何が開けているであろうか。最後にそれをまとめておきたい。

我々に時間そのものはつねに各自の時間として、しかも他者との関わりのある時間として届いているのだけれども、同時に我々はそれをつねに意味づけることによって、出来事に還元してしまう。そのようにしてしか時間を理解することができない。換言すれば我々は時間をシンボルとしてしか生きることができない。そのことによって時間そのものはつねに忘却され、永劫の時の中に呑み込まれてしまう。しかしながら突如として時間そのものが開かれる刹那というものがあり、そうした刹那によって我々自身の時間のありかたが照らし出される。我々は時間そのものをメタファーとして生きることができないが、時間そのものに照らされる体験によって、それをメタファーとして語ることはできるのである。文学も哲学も、そして宗教も形のないものを何かに照らされて形にしていく営みであり、その意味では本質的にはメタファーの事柄ではないだろうか。

村上春樹 スパゲティの年に

田中 克典

この物語の主人公「僕」（以下、「僕」という。）は、1970年もしくはそれ以前のあ
る時に、人間関係の煩わしさに関わることに限界を感じ、それら一切を裏庭に掘った穴に
埋めてしまった。そして、紀元1971年春先からスパゲティを調理し、食べ続けること
で埋めてしまったそれらを完全に消し去り、生きていこうとした。

僕が穴に埋めた物の詳細は分からない。しかし、それらがかなりの量であることは、僕
がスパゲティを茹でるために買ったアルミ鍋が、ドイツ・シェパードの行水にでも使え
そうなくらいの大きさであったことから、また、それらが僕にとって耐え難いような出来
事であったことは、「何かへの復讐のよう」にスパゲティを茹で続けたこと、ボウルの中
に放り込まれた茹でたスパゲティは「踏みつけられた時の影」であったことから、そ
れぞれ容易に推察できる。

ただ、僕がそれらの出来事を完全に消し去ることは容易ではない。それらの出来事は
おそろしく狡猾で、スパゲティとともに鍋の中に放り込んでも、夜の闇の中に紛れ込み
そうになるのだ。また、雨の午後には僕の部屋に顕れようとする。しかし、それらは記憶の
切れ端でしかないので、僕の部屋の前をうろうろするだけで部屋には入らず、そのまま立
ち去っていく。

さらに、僕がそれらの出来事を消し去るということは、これからの僕は「孤独」に生き
ていくということの意味するのだ。それがこれからの僕にとって生きていくということな
のだ。

僕は、春、夏、秋とひたすらスパゲティを茹で続け、食べ続ける。孤独の中で生きて
いくために。しかし、そのことは当初の僕の思惑以上に大変なことだった。僕が求めた
「孤独」は徐々に僕を追い詰めていく。そして、この年の終わりに近づく冬、12月頃
には僕は「死んだ蠅」のようになっていた。もう、こんなことはやめろというように、冬
の日差しが僕を照らしていた。

そんな時、かつての人間関係の世界に引き戻すような電話がかかってきた。僕の知り合
いのかつての恋人だった彼女からの電話だった。僕の知り合いの連絡先を尋ねる内容だ
った。それに関わることは、僕が庭に埋めたかつての人間関係の煩わしさを再び掘り出
してしまうことだった。彼女から僕への哀願のような電話は、かつての僕がかけた電話と同じ
湯女電話だった。僕は、この人間関係を庭に埋め込んだのだ。だから彼女からの電話の言
葉を伝える受話器は氷の柱のように冷たくなったのだ。

いま、彼女に関わることは、これまで捨て去ってきた過去を再び呼び戻してしまうこと

になる。スパゲティーは最後の最後まで茹で続け、食べ続けなくてはいけないのだ。もし、ここでスパゲティーを茹でることをやめてしまったら、もう永遠にスパゲティーを茹でることはなくなるだろう。そのことは僕にとっては、本当に悲しいことなのだ。だから、僕は彼女の哀願を拒む。「スパゲティーを茹でているから」と云って。

それからの僕は、孤独との生を仕上げるようにスパゲティーを茹で、食べ続けた。そして1971年は終わった。

1972年の僕はどうしたのだろうか？そのことを考えるということは、この物語で作者は何を語ろうとしたのだろうか、を考えることでもある。

1960年代は日本経済は高度成長期に入り最盛期を迎えている。他方で、複雑に展開する社会情勢に対する若者の行動も先鋭化し、学生運動が過激化していった時期である。1969年には東大安田講堂事件が起きている。そうして迎えた1970年代も社会は複雑に動き続けていた。

1960年代後半から1970年にかけての激動の時代の中で、様々な人間関係に巻き込まれながら多くの日本人が精いっぱい生きてきた。友人関係、隣人関係、家族関係、仕事関係……。それらは、自分の生に対して好循環を作ることになれば、どうしようもないような桎梏となることもある。後者の場合、どうするか？所謂、燃え尽き症候群のような状況に追い込まれた人たちも多かったのではないか。そして、この物語の僕もそのような一人だったのではないか。そのような状況に陥った人たちは、どのような対応をとったのか？自ら命を絶った人もいた、何らかの形で社会からの逃避をした人もいたのだろう。

この物語の僕は、それらの人間関係を一方で自分の裏庭に埋め込んで、さらに他方で一年間かけてスパゲティーに化して茹でこみ、食べ続けて消失させようとしただけなのか。いや、ちがう。僕が、スパゲティーとして茹でこみ食べ続けたのは、そのことによって新しい自分の生を作り出す作業だったのではないか。新しい自分の生、新しい僕をつくることで、過去の僕、過去の人間関係を客観的に見つめることができる、そうして、これまでの人間関係を新しいものに作り替えることができる。その繰り返しで、私たちはこの社会を生きている。

1971年を乗り切った僕は、このことを確認したのではないだろうか？

だからこそ、「1971年に茹で続け、食べ続けたスパゲティーの材料の小麦、それを作り続けたイタリアの農夫たちは、明るい団らんの食卓に置かれたスパゲティーを想像していただろう、しかし、僕の前に置かれたスパゲティーは過去のしがらみを消滅させ、孤独の塊と化したものだったのだ、こんなことを知ったらイタリアの人たちは仰天しただろう。」と、1971年の僕を客観的に見えるような僕になっていたのではないか。

現代社会に於いても、人々は自分が社会とどう関わって生きていけばいいのか、現実社会の中で自分の立ち位置はどこにあるのかなどに悩むことは多い。そして、自分を取り戻すために、自分と社会との関わりに関するスイッチのオンとオフの兼ね合いに悩む（たとえば家に帰っても仕事のことが頭から離れないなど）ことは多い。しかし、問題の根本は、

オンとオフのスイッチではない。人間関係に入っていくオンのスイッチと「私」の世界に入っていくオンのスイッチをそれぞれしっかり持つておくことなのではないか。そのためには、「私」という器をしっかり作り上げていくことが大切なのではないか。

過去の人間関係を消し去ることなど、到底無理なのだ。

2023年1月12日記

以上

スパゲティーの年越し

大藤 渉

私たち読者は、突然、「スパゲティーの年に」投げ込まれる。「一九七一年、それはスパゲティーの年であった」。1971年は、スパゲティーの年である。1970年に何かあったのか、1972年に向けての準備なのか、その理由はわからない。だが、いずれにせよ「僕」は「スパゲティーの年に」、そのただなかに生きている。私たちは、「僕」とともに「スパゲティーの年に」入り込み、その出口を探さなければならない。

時は1971年、どこから出ることができようか。ひとまず、「僕」とスパゲティーの関係から考えてみよう。その関係は、ある時は閉じられた円環のようである。「僕は生きるためにスパゲティーを茹でつづけ、スパゲティーを茹でるために生きつづけた」。またある時は一方向的な関係にある。すなわち、「僕」とスパゲティーは、料理するものと料理されるものであり、食べるものと食べられるものである。「基本的には僕は一人でスパゲティーを茹で、一人でスパゲティーを食べた」。時として、それらは互いに関係を結ぶことで、他方を別のものに変えてしまう。スパゲティーは、「僕」に、あるイメージを連想させ、「僕」を監視する者、哀悼者へと変身させる。「僕」はスパゲティーをあるイメージで覆い隠し、スパゲティーではないものに変える。スパゲティーは、いまや「裏切った恋人から送られた古い恋文の束」であり、「踏みつけられた時の影」であり、「おそろしく狡猾」なものたちである。

今、目の前で茹でているスパゲティーは、昨日茹でたスパゲティーとは違うスパゲティーであるが、それは「スパゲティー」である。異なる種類の Pasta であろうとも、異なる種類のソースであろうとも、ともにある具材が何であろうとも、それは「スパゲティー」である。それを茹でる僕も「僕」である。言葉の上で考えるかぎり、すなわち「スパゲティー」や「僕」から考えるかぎり、目の前のスパゲティーや僕を見ることができない。「スパゲティー」から、ある何かを連想して思い浮かべても、「スパゲティー」に連れ戻されてしまう。そういうわけで、「僕」とスパゲティーの関係は、言葉の次元で抜け出そうとしても袋小路に入る。

「僕」がスパゲティーを食べているとき、記憶の切れ端から思い出すことのできる誰かが部屋に入って来る予感がする。だが、誰も入って来ることはない。それは、過去にあったことを想起することにとどまる。誰かが「僕」を外に連れ出すことも、巻き込むこともない。意識しうる記憶では、起こった過去から抜け出すことはできない。ただ思い出しうることを思い出すばかりでは、「僕」の身に起こることは何ひとつわからない。意識しうる与えられた過去にとどまるかぎり、同じことを繰り返すしかない。こうして明日も明後日も、茹でるべきスパゲティーをただ茹でつづける。ここでも「僕」とスパゲティーの円

環は保たれる。

「僕」がスパゲティーを茹でつづけることは、スパゲティーを茹でることに変化をもたらさないが、茹でる「僕」に何らかの変化をもたらす。「アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった」。当初、「誇り」を感じさせ、「僕」の暮らしと「混然一体」となっていたスパゲティーは、いつしか「一人で食べるべき料理」へと変わっていった。「僕」にわかるのは、その結果だけであり、「理由はよくわからない」。変化した結果は明らかだが、変化の原因には底がなく、暗い。さらに、春、夏、秋とスパゲティーを茹でつづけた僕は、「孤独な女のように」なり、スパゲティーは「古い恋文の束」になった。しかし、「僕」とスパゲティーの間で結びつき方は変わろうとも、「僕」は「スパゲティーの年に」とどまっている。「僕」は意識されたものを意識するだけで、あらゆる出会いを、触発を受けつけない。年は明けない。

冬の12月、「僕」は「死んだ蠅のように」横たわっていた。3時20分に電話が鳴る。しかし、「僕」には、連想の方がリアリティを帯びて現われる。まず、「空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片」が聞こえてくる。何度か聞いた果てに「百パーセントの電話のベルになった」。意識は、それが意識するものに対してどこまでも二次的である。限りなく死に近づいている「僕」の世界において、知覚の仕方は転倒している。現実が現実なのではなく、現実が「現実」になるのである。あらかじめ与えられているものをあらためて「現実」として認識するのである。認識された現実は、現実そのものではない。「僕」は、電話のベルに触発され、それに応じた。手を伸ばして受話器を取った。

電話の相手は一人の女の子である。電話がかかって来るんじゃないかという気で終わることなく、女の子との関係を繋ぐ電話は、現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベルとともに来た。女の子は言う。「ねえ悪いんだけど、彼が今何処にいるのか教えてくださいませんか?」「僕」は本当に現実か確かめるために、電話のコードを目で追い、電話機に接続しているか確認する。そのコードはちゃんと電話機に接続している。現実のトラブルに巻き込まれる可能性があると感じた「僕」は、曖昧な返事をする。自分自身が壊されないように、今と同じ状況にとどまろうとする。こうして「僕」は、触発を受けても変化を起こすことができない。

しかし、女の子は、そんな「僕」の気持ちを見透かすかのように「だれも教えてくれないのよ」と冷やりとした声で言う。その言葉は、逃げようとする「僕」の出口を塞ぎ、否応なく関係の中へと巻き込もうとする。「僕」は、関係を断ち切るために、「本当に知らないんだ」と応答する。だが、その声は「僕」の声であるけれども、「僕」の声として聞こえない。嘘をついていることを意識した「僕」の発する声は、「僕」の声ではない。「僕」の頭の中をのぞいているかのように、女の子は黙り込む。何も語っていないが、女の子は語りかけてくる。「僕」のもつ受話器は受話器のままであるが、「氷の柱のように冷たく」

なり、やがて「何もかもが氷の柱に変わっていった」。もう一度、「僕」は、しらを切ろうと試みるも失敗する。

いかに失敗しようとも、「僕」はくだらないドタバタに巻き込まれたくない。そこで「僕」は、「悪いけど」と切り出すが、逆に、女の子から「ねえあなた、私のことが嫌いなんでしょ？」と問われる。こう問われると「僕」は自分自身に目を向けざるをえない。だが、その答えが嫌いであろうが嫌いではなからうが、トラブルに巻き込まれるか否かという問題への解にはならない。そこで「僕」は、電話を通して繋がっている女の子との関係を、意識において空想したスパゲティーの関係に置き換えようと試みる。「スパゲティーを茹でてるんだ」という嘘は、「僕」の心にとても馴染んだ。それは、「僕」にとって嘘ではない嘘である。意識の上で思い浮かべる空想のスパゲティーはまさしくスパゲティーである。意識の上では、「僕」にとって、女の子との繋がりなど無いに等しくなる。

女の子は沈黙した。「僕」とスパゲティーの円環を問うかのように。女の子は誰と食べるかを問うが、「一人で食べる」と「僕」は言う。「僕」は、「僕」とスパゲティーだけの関係に閉じようとする。女の子は長いあいだ息を殺し、それからゆっくり空気を吸い込んで、次のように言う。「あなたにはきっとわからないと思うんだけど、でも私、本当に困ってるのよ。今どうしようもないのよ」。どうやら「僕」は、女の子に応答しないことで、女の子が困るという関係に巻き込まれてしまった。厳密に言えば、そもそも現実に巻き込まれないということはない。「僕」が意識したかはともかく、「僕」はそのような状況に置かれている。それは「僕」の身に起こっている。にもかかわらず、最後まで、「僕」はスパゲティーを茹でつづけた。触発を受けても変化を起こすことができない。その姿に対して、女の子は、力なく笑い、「あなたのスパゲティーによろしくね。美味しいといいわね」と言って去った。まるで「関係を断ち切ってまで作って食べるスパゲティーは美味しい？」と問うかのように。

「僕」はスパゲティーの年を越えた。その結果は明らかであるが、その原因はわからない。だが、問わざるをえない問いこそが、1971年の出口を切り開いたことは確かであろう。誰とも関わりあいになりたくない「僕」を起点とする仕方では、出口はどこにもなかった。ドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中でスパゲティーを茹でようとするかぎり、その鍋の中から出ることはできない。ただ「あなたのスパゲティーによろしくね」という声が、「その鍋の中で生きるのは楽しい？」という問いが出口を指し示す。その鍋に亀裂をいれることのできるほどの隕石のような問いこそが、出口を見出す。問わざるをえない問いは、「百パーセントの現実の空気を震わせる百パーセントの電話のベル」によって、ただ出来事によって生じる。「くだらないドタバタ」という出来事が、「僕」を「スパゲティーの年に」投げ入れたとすれば、そこから抜け出させるのも電話という出来事である。

ある時点における結果は判明であるが、その結果が次の瞬間にどのような結果を生み出すかはわからない。イタリア人は黄金色の麦を輸出することで、「僕」の「孤独」という

結果を生み出し、「僕」は女の子との関係を断ち切ろうとすることで、女の子が置かれている状況に巻き込まれた。生きるために茹で続けたスパゲティーは、「僕」を死んだ蠅のようにさせ、トラブルに巻き込むかに見えた電話は、スパゲティーの年を越させた。意識が把握するのは起こったことであり、ただ結果だけである。結果にはそれが産み出される過程があり、理に適った原因がある。だが、それは、意識の上で掲げられた目的や理由では決してない。

状況から切り離されて存在するもの、何にも影響を受けないものは、ただ意識の上でのみ成り立つ。状況の外に存在するものはなく、あらゆるものは状況の中にいる。それを明かすのは、今、置かれている状況を揺るがすような何事かによる触発、あるいは、これまで見えなかったものを見させるような何者かとの出会いである。出口を見つけるには、「僕」からはじめるのではなく、「ある何か」に触発され、やむをえずはじめなければならない。その出口は新たな入口である。それは、今この状況を越え、別の状況へと移り住むことである。

ただし、今の状況を抜け出すことは、スパゲティーとの関係を断ち切ることではない。問題なのは具体的な状況——死んだ蠅のように生きる「僕」、困っている女の子に応じることのできない「僕」——である。「僕」が駄目にならないよう、ひどい状況から抜け出すには、「僕」におけるスパゲティーの位置がどのような結果を産み出しているか問うこと。「僕」におけるスパゲティーの位置を変化させ、新しい状況を再びつくりだすこと。「僕」とスパゲティーの間で、「僕」でもスパゲティーでもない何かと出会うこと。絶対的な「孤独」の底で、どのような出会いも可能になる。そこにおいて「僕」は、年を越し、新年を迎える。

村上春樹「スパゲティの年に」読書感想文

岡部 昌平

孤独

この作品は 1971 年にスパゲティを作り続けた男の回想ではじまる。社会のありとあらゆることから遮断されて、しがみつくようにある行為に集中することは誰にもある経験かもしれない。それは孤独だろうか。関係を切断しようとしているのはむしろ男のほうではないのか。

男は過去によって形作られており、あらゆる点で場ちがいな自分をもてあましている。その喪失した世界のなかでスパゲティによって自分の輪郭をかたち作っている。沸かした湯のなかに記憶がすべり落ち、湯気をたて、ぐるぐるまわる。からみ合うことは避けなければならない。スパゲティは男が忘れたい記憶のすべてであり、それを料理するのは（言葉のとおり）そこにあるものを支配して自分をとりもどしたいから。記憶のなかの男は何かに主導権を奪われていたにちがいない。

訪問者

すべてを忘れたい男にとって訪問者とは何か別のことで気を紛らわせてくれる期待なのだろうか。スパゲティを食べ続けるしか逃れる術をもたない男に何かきっかけを与えてくれる訪問者。そんなものを期待しながらスパゲティを茹でる毎日から抜け出せないでいたのかもしれない。裏庭に埋めてしまった過去もきっとそんな風に訪ねてきたはずなのに――。

電話の女

そこに記憶のなかの女が電話という別の扉から入ってくる。訪問者は記憶の外からではなく消してしまいたい記憶の側からやってきたのである。電話が意味するものはすべて男の側にある。電話が切り裂いて見せたのは彼自身のなかにある動かしがたい事実（過去という現実）にほかならない。その場合、電話はなにげない会話でなければならない。（電話の）相手が意図せず発した言葉が男に最大限の意味をもたらす。その結果どうなったのか？ どうにもならない。どうにかなっては起承転結になってしまうから。

時刻

読書会では作品のなかに具体的な時刻が記されていることが話題になった。その意図はどこにあるのだろうか。ここでは特殊と普遍を問題にしたい。特殊（現実）は矛盾だらけ

で、その矛盾のなかにこそ問いがある。普遍は特殊のなかにこそ垣間見えるべきもので人にはそれしか方法がない。だからこそ作家は日時を記すのではないか。葬りたい記憶は常にあの日のあの時であって、あのころではないのだから。

まとめ

男は 1971 年までに起きたことにも、1971 年にも「ついていけない」もやもやとした違和感をかかえているのではないか。そして 1971 年を回想している 80 年代にももやもやを感じているような気がする。

2022 年 6 月、その時代の終わりを象徴する 50 年前のある事件の当事者が、ミレニウム世代の若者たちと公開で対話しているようすが報じられた。東京拘置所のなかで事件を知った KY 氏は「圧力を受けても、過去の言動と合わなくなっても、おかしいと感じた時は否定すべきだ」と若者たちに呼びかけている（上毛新聞 2022 年 6 月 19 日）。もやもやから導かれるひとつの答えがここにある。

それでも、あのもやもやが晴れることはないのではないか。「永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティ」は対話に参加した別の当事者 HK 氏の言う「われわれという主語で語り、自立できなかつた」自分（男）であり、二度と還ることのない命のようにも思える。

村上春樹『スパゲティーの年に』:読書感想文

『デュラム・セモリナの願い』

奈原 伸雄

④ イタリア人と日本人

この小説において、「スパゲティー」は《イタリア》及び《イタリア人》の「象徴」である。素材は《デュラム・セモリナ》、すなわち《イタリアの平野で育った黄金色の麦》。燦爛と降りそそぐ南方の陽光を吸収したこの質料因が焦がれるのは、おのれの個性を生かしてくれて、地産地消に精を出す、「コミュニケーションの天才たち」の底抜けに明るい「社交性」であろう。これを「輸入」することで、われわれの「孤独」は存続できた。あるいは、これを「輸出」することで、彼らは「社交」に根拠を与えてもらって《仰天したことだろう》。グローバリズムの「場所」において、輸出と輸入は各々の生き方を相互に「逆限定」して真の自己の実現を促す。しかし、「スパゲティー」に因んでこうした「象徴性」が明かされるのは、いよいよ文末になってからの「最後の5行」である。ここに達するまでの道行きは暗かった。(《 》内は本編『村上春樹全作品 1979-1989』版からの引用。以下同じ)。

④ スパゲティーを一人で食べる理由

冒頭、いきなり《一九七一年、それはスパゲティーの年であった》と、「スパゲティー宣言」のようなものがあって、その年にはスパゲティーを調理することは僕の《誇りであり》、《希望》であるはずであった。しかし、この年に或る《出来事》が起こることが予告されて、「*」を越えるとやはり事態は暗転する。《基本的には僕は一人でスパゲティーを茹で、一人でスパゲティーを食べた》。《一人でスパゲティーを食べているとよく、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入って来るんじゃないか》という気がするほど人恋しいのに、それでも《一人で食べる方がずっと好きだった》。《理由はよくわからない》と言いながら、実は、独食は何と《何かへの復讐》の代償行為であったのだ。

素因と思われるのは、暗くても鮮明な対人関係の恨みである。その記憶は、《古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように》、《踏みつけられた時の影》が《夜の闇の中に紛れ込んで》しまうほどに暗澹として、しかも《熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んでいく》ようにリアルであった。その偏執が愛玩するのはスパゲティーというある種のフェティッシュ(呪物)であるが、拘りはそれを調理する行為から道具へ、調味料やソースや具材へ向かい、さらには屈折した肌淋しさが《にんにくや玉ねぎやサラダ・オイルや何やかや》とない交ぜになって、《なんだか古代ローマの下水道のような匂い》が、部屋の中のありとあらゆるモノに染み付いていく。

④「象徴」：人恋しさの光と影

「象徴」とは、端的には「抽象を例える具象」とでも言えようか。この公式をそのまま当てはめると、ここでは「イタリアを例えるスパゲティー」となるのであるが、文脈から分かるように、この段階で「スパゲティー」が示唆するものは、《黄金色の麦》のイメージとは真逆の、鬱屈した、いささか複雑な事情であった。一般に、「象徴」が示す具象性はシンプルでなければならない。ところが、案ずるまでもなく、これまでの屈折した《夜の闇》の顛末は、《デュラム・セモリナ》によって開かれる「最後の5行」の、その中ほどに端座する《「孤独」》の二文字に集約されていた。太陽に黒点があるように、あるいはゴッホの『麦畑』にカラスが描かれているように、自然と天才は黄金色の表面に黒の一点を穿って「実在の象徴」を完成する。

「社交」が「スパゲティー」という「象徴」の表の顔としたら、「孤独」は背後でそれを支える黒衣という位置づけになるだろうか。明朗な「社交」は堅固な「孤独」の自覚に裏付けられていなければならない、「歓喜」の根拠が「絶望」であるように。そうすると、「社交」と「孤独」は「象徴」という媒体によって、逆接的に接合していることがわかる。それが表から一目でわかる標が、前述の「黒の一点」である。「象徴」を構築する作家のこうした表現行為からは、主人公がこれまで苦労してきた筋道が立ったような、何か吹切れたような収まり具合を感じる。《電話を切った時、床の上の光のプールは何センチか移動していた。僕はその光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた》。しかも、最終段階でこうした一定の「収まり具合」が認められるのは、この作品の「象徴」が孕む重層的な「時間の範疇」のせいであることも忘れてはならない。

④「時間」：癒しの乗物

普通、「象徴」は不変の価値を維持するために変化しないものであるが、その裏で、僕の「復讐心」はかなり自由に変貌を遂げた、あたかも裏にありつただけの自由がなければ「象徴」が成立しないかのように。一時は依存症が逆恨みに転じてスパゲティーを《狡猾》と邪推したり、次にはそれを悔いて《名もない気の毒なスパゲティーたち》と言って憐れんだり、上げたり下げたり毀誉褒貶を重ねても、煩惱の火は最後には《僕は彼らを悼む》ように終息するのである。《春、夏、秋、と僕はスパゲティーを茄でつづけ》、《スパゲティーたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった》。主人公は、最早、生きとし生けるものも山川草木も慈しむように、スパゲティーへの偏愛を本来の時間の流れに乗せて、いずれおのれの我執を寂滅する。

そして、《一九七一年の十二月の光の中》で《三時二十分に電話が鳴った時》、《年》の「時間」に仕掛けられた「闇」の重奏低音は炸裂した。これは、「時熟の画期」である。僕は生まれて初めて嘘をついた。友人の彼女から、《(別れた)彼が今何処にいるのか教えてくれない?》と聞かれたとき、実に上手に嘘をついて知っていることを教えなかった。し

かも、《今スパゲティを茹でてるころなんだ》と応える嘘の《微妙な》間合いが効果を上げて、5回もこれを繰り返した。うち、1回は電話をかけてきた《印象の薄い女の子》が、《今スパゲティを茹でてる最中だからね?》というなぜか同語反復の同調をする。騙す者と騙される者との波長が奇妙に取れんしたのだ。そして、《僕は思うのだけど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティについて考えることは悲しい》。

④「象徴」と「時間」

人間関係に嘘は付き物である。言葉によるコミュニケーションを主な手段としてそれが成り立っている以上、「言葉はすべて嘘である」という達観も成り立つほどである。しかし、それは「言葉」というある種の「象徴」の裏の真理であって、「言語ゲーム」はその「孤独」の闇を抱えて成立するところの表の仁義であることを忘れてはならない。だから、「黒の一点」において上手に嘘をつくことは、ひたすら「いい人」でなければならない強迫観念から解放されるのと同じくらい重要なツールである。《僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえずことはできない》。その墓の「墓碑銘」には「孤独」と書こう。

それにしても、振り返ってもう一度目をやる『スパゲティの年に』というタイトルは、独特の違和感を湛えて精妙である。《スパゲティ》と《年》という、俄かには意味が繋がらない遠いイメージを、例えば、《スパゲティ》が「象徴」の空間面としたら、《年》はその時間的な支えとなって収まりを付ける。前に述べた「時熟の画期」とは、人生の成長段階における「青春時代」の、いわば反抗期からの卒業を「象徴」する。それは、同時に「学生時代」と「1970年代」の反-体制的ジェネレーションの克服であるだけでなく、これらの要素を重層的に含んで、「孤独」の概念が人間の如何ともしがたい孤立性や人間関係の断絶性を集約するとともに、その逆接としての「社交」となって、共に生きるわれわれの連帯と公共性を保証する。

トラウマからの解放

——「スパゲティーの年に」を読む——

村上 林造

I

「スパゲティーの年に」の出来事には、二つのレベルがあるように思われる。一つは肉眼で見ることができる現実世界のレベルであり、もう一つは肉眼で見ることのできない非現実のレベルである。例えば次の引用では、場面 A の傍線部は現実のレベルの出来事であり、場面 B の波線部は目に見えない非現実のレベルの出来事である。

(場面 A)

基本的には僕は一人でスパゲティーを茹で、一人でスパゲティーを食べた。何かの折に誰かと二人で食べることもないではなかったが、でも一人で食べる方がずっと好きだった。その頃の僕にはスパゲティーとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた。どうしてそんなふうにしたのか、理由はよくわからない。

スパゲティーにはいつも紅茶を飲んだ。サラダも作った。だいたいはレタスと胡瓜を混ぜただけのかんたんなサラダだった。どちらも量だけはたっぷりあった。それらをテーブルにきちんと並べ、新聞を横目で睨みながらゆっくり時間をかけて僕は一人でスパゲティーを食べた。日曜日から土曜日までスパゲティーの日々がつづき、それが終わると新しい日曜日から新しいスパゲティーの日々が始まった。

(場面 B)

一人でスパゲティーを食べているとよく、今にもドアにノックの音がして誰かが部屋の中に入ってきて来るんじゃないかという気がした。雨の午後はとくにそうだった。

僕の部屋を訪れようとする人物はそのたびに違っていた。ある時は見知らぬ人物であり、ある時は見覚えのある人物だった。ある時は高校時代に一度だけデートしたことのある足の細い女の子であり、ある時は何年か前の僕自身であり、ある時はジェニファー・ジョーンズを連れたウィリアム・ホールデンであったりした。

ウィリアム・ホールデン？

しかし、彼らは誰ひとりとして部屋に入ってはこなかった。彼らはいかにも記憶の切れ端らしく、部屋の前をうろうろするだけで、結局はノックをすることもなくそのままどこかに立ち去っていった。

外は雨だ。

これを、客観的な出来事（場面 A）とは僕の内面に生じた主観的な出来事（場面 B）と区別する見方もできるかもしれない。しかし、そういうふうに分けるには、場面 B は単に僕がそう「思った」というレベルを超えて、遥かに生々しい現実的リアリティを備えているのではないか。そう考えると、やはりここでは、世界が二つのレベルで捉えられている、あるいは世界が二つの現れ方をしているというべきだろう。それに、場面 A にも僕の内面は十分描かれているのである。それは、「一人で食べる方がずっと好きだった。その頃の僕にはスパゲティーとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた」というところである。つまり、場面 A だけでも、僕が、誰かといっしょに食事をする楽しみや喜びに背を向けていることが明確に見て取れるし、そのように他者と関係を持つことを拒否しているにもかかわらず、僕が一人でスパゲティーを食べる場面には寂しさや暗さ、みじめさは全くなく、むしろそれに自足していることがありありと伝わって来る。

それに対し、場面 B は単に僕の内面を描くというのにとどまらず、その食事場面で起こっている出来事を、異なるレベルで捉えたものと言うことができる。その時、僕の内部に外から訪問してくるのは、「見知らぬ人物」や「見覚えのある人物」であり、具体的には、「高校時代に一度だけデートしたことのある足の細い女の子」、「何年か前の僕自身」、「ジェニファー・ジョーンズを連れだしたウィリアム・ホールデン」である。「彼らはいかにも記憶の切れ端らしく」...とある。彼等は僕の心の深層に堆積した過去の「記憶の切れ端」であり、「雨の午後」にはそれらが、僕の意識の上に浮かび上がり、甦るのである。彼等は「結局はノックをすることもなくそのままどこかに立ち去っていった」のであるから、記憶の層への通路が全面的に開いたとはいえないにせよ、孤独の中で自閉する僕の「外部」とは、過去の記憶が沈殿した深層＝カオスとしての無意識領域であり、1971 年の僕の孤独なスパゲティー生活は過去との関係の中で形成されていることが示唆される。このように見れば、場面 B は単に肉眼では見えない領域というだけでなく、人の心の深層のレベルが開示された場面ともいえるし、世界における表面的現象の彼方にある異界でおこっている出来事ともいえる。

以上のようにみれば、「スパゲティーの年に」では、二つのレベルにおいて出来事が語られ、それらが互いに交錯し、複合しあうことによって世界が開かれてくる構造になっているといえる。次に、場面 B に続く場面を見ていきたい。

II

場面 C

春、夏、秋、と僕はスパゲティーを茹でつづけた。それはまるで何かへの復讐のようでもあった。裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる孤独な女のように、僕はスパゲティーをいつまでも黙々と茹でつづけた。

僕は踏みつけられた時の影をボウルの中でドイツ・シェパードのような形にこねあげ、沸騰した

湯の中に放り込み、塩を振った。そして長い箸を手にアルミ鍋の前に立ち、キッチン・タイマーがチーンという悲痛な音を立てるまで一歩もそばを離れなかった。

僕がスパゲティを茹でるのは、過去の「何かへの復讐のよう」であり、「裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる」ような行為だったという。そして、スパゲティの原料である「踏みつけられた時の影」とは、「復讐」すべき過去の記憶であり、僕の内面には、「裏切った恋人から送られた古い恋文の束」という比喻で語られる何かがいまもまだかまっている。つまり、僕の心は過去に深い傷を受けたのであり、今もその傷は痛み続けているのであろう。そのように見れば、「雨の午後」にスパゲティを一人で食べる僕の部屋を訪れた訪問者は、僕の心の傷とどこかで関わっているのに違いない。先に僕は、「その頃の僕」に「スパゲティとはそもそも一人で食べるべき料理であるように思えた」と語っていたが、それは、スパゲティを食べることが自分自身の心の傷と向き合うことだったからであろう。

場面D

スパゲティたちはおそろしく狡猾だったから、僕は彼らから目を離すわけにはいかなかった。彼らは今にも鍋の縁をすりと越えて夜の闇の中に紛れ込んでしまいそうだった。熱帯のジャングルが原色の蝶を永劫の時の中に呑み込んでいくように、夜もまたじっと息をひそめてスパゲティたちの到来を待ち受けていたのだ。

スパゲティ・アルラ・パルミジャーナ(spagetti alla parmigiana)

スパゲティ・アルラ・ナポレターナ(spagetti alla napoletana)

スパゲティ・アルラ・プレマトウーラ(spagetti alla parmatura)

スパゲティ・アラ・カルトッチョ(spagetti ala cartoccio)

スパゲティ・アルラ・アリオ・エ・オーリオ(spagetti alla aglio e olio)

スパゲティ・アルラ・カルボナーラ(spagetti alla carbonara)

スパゲティ・デルラ・ピーナ(spagetti alla pina)

そして冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた名もない気の毒なスパゲティたち。

スパゲティたちは蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった。

僕は彼らを悼む。

一九七一年のスパゲティたち。

先には、僕が過去の何かに傷つけられ、その傷は今も痛みつづけていることを確認したが、場面 D を読むと、僕のスパゲティへの関わり方は実はそれだけではないことが分かる。むしろここからは、スパゲティとは、僕がどれほど引き留めておきたいと願っても、時の流れの

中で姿を消し、引き留め得ないものなのである。即ち、僕における過去の記憶とは、単に僕の心に深い傷を残しただけでなく、僕にとってはかけがえのない魅力を帯び、今も僕を強く捉えている。またそうだからこそ、僕は、「一九七一年のスパゲティーたち」が、「蒸気の中に生まれ落ち」たかと思うと、「川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった」ことを述べて、「彼らを悼む」と言わずにいられないのであろう。つまり、僕における過去の記憶は、僕にとって、目を背けたいものであると同時に、今もそれに執着し、失いたくないものでもある。つまり、「雨の午後」に僕の許を訪れる訪問者は、僕自身が招いた者であると同時に、彼等を部屋に入れなかったのも僕自身であったのではないだろうか。

1971年の春夏秋冬とそういう生活をきた僕の許に、電話がかかって来る。

III

1971年12月に電話がかかってきた時、はじめはベルの音が「空気の層のあいだを遠慮がちにすべり込んできた見覚えのない記憶の断片」のようだったという。僕の意識の対象は現実の世界より、むしろ「記憶の断片」に開かれている。それがだんだん「電話のベルとしての体裁を帯び始め、最後には百パーセントの電話のベルになった」というのは、現実から隔絶された世界で生きている僕の意識が、現実に戻される過程であろう。

その電話の主は「記憶の切れ端」ではなく、現実の存在の女の子であった。彼女は、別れた「かつての恋人」が「今何処にいるのか教えて」欲しいと言うが、自分だけの世界に自閉した僕には、現実の人間である「彼女の声には何かしら不吉な響き」があり、その声が「冷やり」と感じられたという。「僕は彼の住所と電話番号を知っていた」が、それを教えることでかつての人間関係に巻き込まれることを恐れる僕は、「本当に知らないんだ」と言う。しかし、「それはまるで自分の声には聞こえず、かえって自分は「嘘をつくとすごく変な声になってしまう」ことを確認させられてしまう。また彼女も僕が嘘をついていることを明らかに知っており、僕自身その状況に負い目を感じている。僕はその場面を、「彼女は黙りこんだ。／受話器は氷の柱のように冷たくなった。／それから僕のまわりの何もかもが氷の柱に変わっていった。まるでJ・G・バラードのサイエンス・フィクションの場面のように」と語る。これは明らかに、僕の周りの世界が変わったということであろう。この場面における出来事を、目に見える現実世界のレベルとみるか、それとも目には見えない非現実のレベルとみるかと言えば、そのどちらかに振り分けるのは困難であり、それは二つのレベルが接しあい、せめぎあう境界点における出来事であるように思われる（ここに二重傍線を付したのは、そういう見方からである）。

僕は、その場を逃れるために思わず「スパゲティーを茹でてるんだ」という新しい嘘をついてしまう。自分でも「どうしてそんな嘘をついてしまったのか」わからなかったが、「でもその嘘は僕の心にとってもよく馴染んだ。それはそのときの僕にとっては全然嘘なんかじゃなかったのだ」と感じる。僕はなぜこの「嘘」が、「全然嘘なんかじゃなかった」と感じたのだろうか。それは、スパゲティーを茹でることによって現実を背を向けて自分の世界に閉じこもっていた

当時の僕にとって、「スパゲティーを茹でる」行為は現実と空想のはざまに自分を置く行為であり、僕の毎日はそのような場所で営まれていたからであろう。それは僕には極めて自然な空想だったのではないだろうか。

場面 E

僕は沸騰した湯に空想の塩を振り、空想のスパゲティーの束をそっとすべりこませ、空想のキッチン・タイマーを十二分に合わせた。

「だから、今ちょっと、手が離せないんだよ。スパゲティーが絡んじゃうから」

彼女は黙った。

「悪いとは思うけどさ、スパゲティーを茹でるのがすごく微妙なんだよ」

彼女は沈黙した。受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた。

今「スパゲティーを茹でてるんだ」という僕の嘘に対して、「彼女は黙った」、そして「スパゲティー念を茹でるのがすごく微妙なんだよ」という言葉に対して、再び「彼女は沈黙した」。そして、「受話器は僕の手の中で、再び氷点下の坂道を下り始めた」という。これは何を意味するのか。

ここで彼女の沈黙は、他者に背を向け、一切の交渉を拒否して自分の世界に閉じこもる僕の姿であり、その「冷たさ」を炙り出した。見落とせないのは、現実的な動作としてスパゲティーを茹でるだけでなく、僕が自分自身で「スパゲティーを茹でてるんだ」、「だから、今ちょっと、手が離せないんだよ」と言ったことであろう。自分の口で、自分は今電話に出ることができない、人と話すこともできない、自分の部屋に閉じこもっているということ、「嘘をつく」という形で話したこと、そのことが深いレベルでの僕の真実の姿であることに、僕は直面させられたのであり、僕が繰り返し感じた「氷の柱」や「氷点下」のような受話器の冷たさは、僕がそれを身体で体感したことを示すのではないだろうか。

彼女からの電話に接した僕は、「くだらないドタバタに巻き込まれるのはもうごめんだった。僕はある時心を決めて裏庭に深い穴を掘り、全てをそこに埋めてしまったのだ。もう何人にもそれを掘りかえすことはできない」と述べている。僕のスパゲティー生活とは、「深い穴」に「埋めた」過去の「全て」を誰も掘りかえさないように見張る生活だったのであり、そのように生きる僕の許には過去の「記憶の切れ端」が折々訪れたが、彼等は家の中には入らない。僕が、「踏みつけられた時の影」をスパゲティーに捏ね上げ、茹でて、食べるのは、過去の記憶に対する「復讐」の行為であったと同時に、「裏切った恋人から送られた古い恋文の束を暖炉の火の中に滑り込ませる」行為でもあった。こうやって、僕は人との交際を断ち切り、「深い穴」に埋めた過去の傷から目をそらそうとして、かえってそれに抑圧され、支配され続けてきた。それは、スパゲティーを茹で続ける僕は現実の時間を生きることができず、僕の時間は過去の記憶の中で止まっていたということでもある。それが 1971 年の僕の生活の内実だったのである。

彼女からの電話が鳴った 12 月の午後、僕は「まるで死んだ蠅のように一九七一年の十二月

の光の中に何時間もぼんやりと横たわっていた」とい。これは、その時、僕が時間の止まった世界で疑似的に死んでいたことを示している。それに対し、彼女との話が終わり、「電話を切った時、床の上の光のプールは何センチか移動していた。僕はその光の中にもう一度身を横たえ、天井を見上げた」とある。僕は確かに、同じ「光の中」で同じ姿勢をとっているのだが、それにもかかわらず、「床の上の光のプールは何センチか移動していた」ことを、語り手の僕は見逃していない。確かに、ここには時間が流れているのであり、それは、僕が過去の記憶から解放され、現在を生き始める予兆ではないだろうか。さらにまた、電話が来た時には「何時間もぼんやりと横たわっていた」僕が、電話を切った今は「天井を見上げた」という。ここには、僕に変化が訪れる予感が確かに感じられるのである。女の子との電話を通して、僕の世界は大きく揺り動かされたのであった。

IV

小説の最終章で、僕は次のように語る。

僕は思うのだけれど、永遠に茹でられることなく終わった一束のスパゲティーについて考えることは悲しい。

あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもしれない、と今では少し後悔している。 どうせ相手はたいした男じゃなかったのだから。自分では芸術家のつもりでいる、内容のない空っぽな男だった。口だけが達者で、ほとんど誰にも信用されていなかった。そして彼女は本当にお金に困っていたのだろう。それに、借りた金というのはどういう事情があろうか貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ。

彼女はあれからどうなったんだろう、と僕は時折考える。大抵はスパゲティーを食べながら。彼女は電話を切った後、そのまま午後四時半の影に呑み込まれて消えてしまったのだろうか？ もしそうだとしたら、僕にもその責任の一端はあるのだろうか？ でもわかってほしい。僕は誰とも関わりあいになりたくなかったのだ。だからこそ僕はずっとひとりでスパゲティーを茹でつづけていたのだ。そのドイツ・シェパードが入りそうなほどの大きな鍋の中で。

1971年が過ぎ去った現在、この小説を語っている僕の関心は、「あの時、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもしれない」ということであり、「借りた金というのはどういう事情があろうか貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ」ということであり、「彼女はあれからどうなったんだろう」ということである。他者に対するこのような関心を、「誰とも関わりあいになりたくなかった」ので「ずっとひとりでスパゲティーを茹でつづけていた」という自閉した生き方と比べてみれば、現在の僕が他者との関係の中で生きようとしていることは明白であろう。とりわけ、「借りた金というのはどういう事情があろうか貸した人間にちゃんと返されるべきものなのだ」というのは、人は人間関係の中で果たすべき役割を果たすことによって、世

界は始めて正しく動き、正しく維持されるということである。その意味では、現在の僕は既に過去の呪縛からは解き放たれているのである。

「スパゲティーの年に」とは、過去の何かの出来事によって深い心の傷を受けた青年が、その傷に呪縛され支配されて精神的な死に落ち込みながら、目に見えない深いレベルにおける自らのありようを自分の口で語ることによって、死からの再生を果たす物語であると要約することができるだろう。しかし僕は、その一部始終をスパゲティーとの関わりに託して語る中で、「冷蔵庫の余り物を出鱈目に放り込まれた名もない気の毒なスパゲティーたち」に対して深い共感を寄せ、「蒸気の中に生まれ落ち、川の流れのように一九七一年という時の斜面を下り、そして消えていった」、「一九七一年のスパゲティーたち」を「悼む」と述べている。また僕は、「誰とも関わりあいになりたくなかった」がゆえに、「ずっとひとりでスパゲティーを茹でつづけていた」当時を振り返り、読者に「わかってほしい」と語りかける。僕は、過去の記憶に呪縛され、静止した時間の中で自分の心に受けた深い傷を抱え、それに意識を奪われていた当時に、ある意味を見出しているのであろう。またそうだからこそ、小説冒頭で、僕は「一九七一年、それはスパゲティーの年であった」と述べ、「僕は生きるためにスパゲティーを茹でつづけ、スパゲティーを茹でるために生きつづけた。アルミ鍋から立ちのぼる蒸気こそが僕の誇りであり、ソースパンの中でグツグツと音を立てるトマト・ソースこそが僕の希望であった」と語ったのであろう。現在の僕から見ても、トラウマによる自閉と孤独の毎日は必ずしも全否定されていないし、むしろそれを通り過ぎたからこそ、人間関係の回復への志向があり得たとされているように思われる。少なくとも、深い傷を負った故の魂の孤独を潜り抜ける経験は、真の人間関係を希求する上で積極的な意味をもっているのではないだろうか。